

安藤は、十人分の昼食を注文するために、そば屋に電話を入れた。

「ありがとうございます。あずま屋です」

「あの、出前をお願いします인데요」

「ただいま混んでいますので、ちょっとお時間かかりますが」

「どれ位かかりますか？」

「そうですね。おそらく一時間半位かかってしまうと思うんですけど・・・」

「一時間半？」

安藤は腕時計で一時間半後の時刻を確認した。

「かまいません。お願いします。遅くても一時頃までには届けてもらいたいですけど」

「場所はどこになりますか？」

「岡村一丁目なんですけど」

「岡村一丁目でしたら、一時までにはお届けできると思います。ご注文をどうぞ」

「天ぷらうどんを三人前と親子丼を二人前、それにアジフライ定食、たぬきそば、うな重、大ざる、あんかけそばを一人前ずつで」

「かしこまりました・・・あつ、申し訳ありません！ アジフライ定食は、今日は終わってしまったんですけど」

「そうですか・・・イカフライ定食はありますか？」

「はい、あります」

「ではイカフライ定食にして下さい」

「かしこまりました。それでは、ご住所とお名前をお願いします」

「横浜市磯子区岡村一十二一、浅倉ハイツ一〇五号室の安藤です」

「はい、わかりました。ではご注文を繰り返しますのでご確認下さい。天ぷらうどんが三人前、親子丼が二人前、イカフライ定食、たぬきそば、うな重、あんかけそばを一人前ずつで」

「あつ、あと大ざるも一人前です」

「すみません！ 大ざる一人前ですね。で、ご住所の方が横浜市磯子区岡村一十二一浅倉ハイツ一〇五号室、安藤さんですね」

「はいそうです。よろしくお願いします」

電話を切った後、安藤は領収書を頼むのを忘れたことに気づき、再び店に電話をかけた。

「ありがとうございます。あずま屋です」

「もしもし、今電話をした安藤ですけど、領収証をお願いします인데요」

「領収証ですね。わかりました。お名前はとうしますか？」

「安藤でお願いします」

「はい、わかりました」

「それでは、よろしくお願いします」

一時間後、安藤家のインターホンが鳴った。予定より三十分早い配達だった。